地域再生計画

1 地域再生計画の申請主体の名称

太地町

2 地域再生計画の名称

鯨の民の鯨による町作り計画

3 地域再生の取組を進めようとする期間

平成17年度から平成21年度まで

4 地域再生計画の意義及び目標

【地域再生計画の意義】

太地町は紀伊半島の南端中央部に位置し、総面積5.96km²の半島形の小規模な町で、町全体が熊野灘に面し、海岸線は豪壮優美なリアスを形成しています。太地町では、このような地形を利用して昔から単発的な捕鯨を行っており、クジラとの関係は深いものがあります。1606年、当地の豪族、和田忠兵衛頼元が尾張師崎の漁師・伝次と泉州堺の浪人・伊右衛門と共に捕鯨技術の研究を進め、組織による捕鯨「突捕漁法」(古式捕鯨)で捕鯨を大々的に始めました。

その後、1675年に頼元の孫の和田頼治がクジラを網に掛けて突き捕る「網掛突捕法」を考案したことによって、太地捕鯨は飛躍的に発展しました。頼治は後に太地覚右衛門頼治と名乗り「日本永代蔵」(井原西鶴著)の登場人物「天狗源内」のモデルとされ、巨万の富を築き、紀伊国屋文左衛門と並ぶ紀州を代表する富豪でありました。太地町は、そのようなクジラで富豪を生んだ町でもあります。また、明治時代に入り古式捕鯨が衰退した後も、「クジラの町」としての在り方は変わらず古式捕鯨の伝統を受け継ぎながら、近海での小型捕鯨や南氷洋などでの捕鯨に多くの町民が参加し、優秀な砲手も多数輩出した町でもあります。

このように、クジラは太地町民の生活には欠かすことの出来ない海産物なのです。今、原住民捕鯨を守ろうとの声が聞かれますが、太地こそ常に該当する町なのです。商業捕鯨の禁止以来、この町の漁師や仲買は、小型沿岸捕鯨や追い込み漁の「いさな組合」が決められた頭数の小型歯クジラ漁を商っております。商業捕鯨の再開のめどが立たず、太地町がこの先どうなるかは明らかではありませんが、「クジラ一頭捕れば七浦潤う」と言われたクジラを地域の資源として活かしていく必要があると考えます。

太地町は、まだまだ自然が残されており、その景観美と「くじらの博物館」を中心とした観光(イルカ放牧・カヤック事業)、それとクジラ料理のグルメスポットとして(どこでも口に入るような物でなく、昔からの太地独特のクジラ料理、漁師しか食べることの出来

なかった部位を使った料理などを売り出すことで、クジラ食文化を伝えていく)クジラ一色で七浦を潤していこうと考えております。すなわち、クジラの町・太地町をもう一度、クジラによって活性化していきます。

【地域再生計画の目標】

くじらの博物館で得た飼育技術を利用し、良港と名高い森浦湾でイルカの放牧を試みます。イルカの泳ぐ湾内を、カヤックに乗船して自由に巡って頂き、また勝浦温泉からの観光船入港に合わせてのイルカの出迎えや、湾全体を使用するショーを予定しています。湾のほとりは、くじらの博物館がある常渡地区、上質な温泉が湧く夏山地区があり、この周辺にバーベキュー施設を設置し、鯨肉を食して頂きます。バーベキュー施設周辺では、太地の特産品(クジラの加工品等)を各地で行われている朝市や日曜市のような催し物で販売します。イルカの飼育及び放牧事業を実施することは、小型鯨類の捕獲など捕鯨技術の継承や飼育技術の継承が図れます。それに伴い雇用機会も増加されます。現在、水族館の飼育する小型鯨類のトレーナーになることを夢見ている若者が増えております。しかし、水族館等の施設は、国内では数に限りがあり、希望する若者にとっては狭き門となっております。これらの若者が夢を叶えられるような環境を整備し、より多くの就職場所と機会を与えることで海洋思想の啓発や就業機会に寄与でき、過疎・高齢化著しいこの地域の活性化に繋がります。

次に、県内外の幅広い年代層とのふれあいを通じ、現代の共通課題である自然と資源の保護について相互に理解を深め、青少年の健全育成や地域社会の構築に寄与することを目的に森浦湾を中心にカヤック事業を行います。具体的には、自然環境の整った森浦湾でカヤックの体験を行い、将来的にはイルカと併走しながら、イルカとのふれあいができるようにしていきます。また、対岸には良質な温泉が湧き出る夏山地区がありますので、ここにカヤックでの休憩施設など(トイレ、洗い場)を整備します。カヤック事業を実施することで、低迷する太地町の観光の起爆剤になることを期待しており、今後、観光客の増加に繋げていき、さらには、体験交流事業を通じて都市と漁村の交流を図ります。

当地方の熊野地域では、隣町的那智勝浦町的那智大社や熊野古道をふくめた「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されました。それを契機に今後、太地町にも観光客の増加がより一層期待できます。特に外国人観光客の増加が予想され、外国人の対応やボランティアガイドの育成も必要になってきますのでマニュアル等を作成します。併せて町内への来訪者に対し、太地町に訪れたと実感でき、道に迷うことなく散策できるような統一的な案内標識(クジラのシンボルマークなど)を設置し、利便性やアピール度の向上を図ります。

5 地域再生計画の実施が地域に及ぼす経済的社会的効果

太地町を訪れる観光客は、隣町的那智勝浦町にある南紀勝浦温泉に宿泊する、また宿泊した客が非常に多く、観光バスで訪れる団体客にいたっては、殆どがそうであります。そのため、那智勝浦町の観光客が減少すると、それに伴い太地町の観光客も減るといった状況

にあります。データでみてみますと那智勝浦町の観光客の平成15年総数は1,701,202人で平成11年に比べ474,094人減少しています。太地町の観光客の平成15年総数は260,412人で平成11年に比べ、こちらの方も102,645人減少しています。すなわち現在のところ、太地町の観光は那智勝浦町に依存しているといつて過言ではありません。

しかし、今回の各事業を実施すること（地域再生）により、太地町自身で観光客を誘客し、地場産業を活性化していきます。

イルカの飼育及び放牧事業を実施することにより、小型鯨類の捕獲など捕鯨技術の継承や飼育技術の継承が図れます。それに伴い雇用機会も増加し、過疎化や少子高齢化が抑制されます。さらに、カヤック事業を実施することは、観光の起爆剤になり、併せてシンボルマークの入った案内標識を整備し、またボランティアガイドの育成、外国人観光客への対応やエコツアーの実施などを行うことで観光地としての「クジラの町・太地町」の魅力が増し、観光客の増加が期待できます。

将来の観光客入込数の目標数として、平成18年には15年比、15%増の299,474人、平成21年には15年比、40%増の364,577人を目指します。

【過去5年間の観光客数】

	平成11年	平成12年		平成13年		平成14年		平成15年	
観光客総数	363,057	311,598	85.8%	303,458	97.4%	296,957	97.9%	260,412	87.7%
宿泊客	45,046	42,761	94.9%	40,798	95.4%	40,862	100.2%	44,556	109.0%
日帰り客	318,011	268,837	84.5%	262,660	97.7%	256,095	97.5%	215,856	84.3%

【将来の観光客入込数の目標】

	平成15年	平成18年	平成21年
観光入込客	260,412人	299,474人	364,577人

6 講じようとする支援措置の番号及び名称

- 212016 「一地域一観光」を推進する「ひと」「情報」の充実
- 230007 案内標識に関するガイドラインの策定
- 213004 エコツーリズムに対する支援

7 構造改革特区の規制の特例措置により実施する取組その他の関連する事業

- 「(仮称)太地町ホエールビジネス振興センター整備計画」の策定

【目的】

太地町は古式捕鯨発祥の地として、古くからクジラと関わってきました。「クジラー頭捕れば七浦潤う」と言われ、捕鯨は町民の生活にかかすことの出来ない産業でした。捕鯨モラトリアム以降、町では、捕鯨の歴史と文化を核にしたまちづくりと

して、クジラに関する施設などを整備してきました。それらの施設は、町のシンボルとして町の振興を担ってきましたが、どうしても産業的な要素が弱いのが実情でした。

そこで今回もう一度、クジラを産業資源として捉え、クジラをはじめとした水産業を核に漁村の再生を図っていき、町を発展させていきます。

具体的には、近代的で衛生的なクジラ解体処理と多様な関連産業振興を担う(仮称)太地町ホエールビジネス振興センターの整備を計画していきます。

和歌山県では一昨年より「緑の雇用事業」として、林業を中心とした雇用促進を行い、成果を上げています。当町といたしましては「青(海)の雇用事業」として海を生かした事業を中心に雇用の促進も併せて図っていきたいと考えています。

8 その他の地域再生計画の実施に関し地方公共団体が必要と認める事項

なし

別紙

1 支援措置の番号及び名称

212016 「一地域一観光」を推進する「ひと」「情報」の充実

2 当該支援措置を受けようとする者

太地町

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

事業を行う森浦湾には、「くじらの博物館」を中心とした「太地くじら浜公園」がある常渡半島があり、年間17万人（平成15年度）の観光客が訪れています。

平成16年には、隣町的那智勝浦町的那智大社をはじめとした熊野・高野地区が「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコの世界遺産登録され、それを契機に外国人観光客の増加が予想されます。

そのため、外国人への対応やボランティアガイド等も必要となることが予想されるため、平成16年度において支援措置に掲げられている外国人対応マニュアルが作成された場合は、これを活用していきます。

別紙

1 支援措置の番号及び名称

230007 案内標識に関するガイドラインの策定

2 当該支援措置を受けようとする者

太地町

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

道路等の整備やレンタカーの普及で乗用車での移動が主流になっている当地方ではありますが、近年のウォーキングブームで歩きながら観光を楽しむ方々も、年々増えつつあります。また、平成16年には、隣町的那智勝浦町的那智大社をはじめとした熊野・高野地区が「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコの世界遺産に登録され、熊野古道を歩くなど「ウォーキング」を目的とした観光客の増加が予想されます。現在、当町の幹線道路には、幅の広い歩道が整備されていますが、歩行者に対しての主要な施設を記した案内標識が無いのが現状であります。ガイドラインが作成された場合は、案内標識に関するガイドラインを用いて、案内標識を設置し、歩行者の利便性の向上を図ります。

別紙

1 支援措置の番号及び名称

213004 エコツーリズムに対する支援

2 当該支援措置を受けようとする者

太地町

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

主体 太地町

場所 太地町森浦湾周辺

町ではエコツーリズムを実施することにより、熊野の大自然と一体になって、体力・知力・気力などスポーツの基本的なプログラムを習得すると共に、県内外の幅広い年代層とのふれあいを通じ、共通の課題である自然と資源の保護について相互に理解を深め青少年の健全育成や地域社会の構築に寄与することを目指します。

具体的な内容としては、比較的波の穏やかな森浦湾内におけるシーカヤックでの遊覧を実施します。インストラクター指導のもと、数コースの設定(15分から50分ほど)を予定しています。

将来的には、くじらの博物館の飼育技術を用い、湾内にイルカを放牧してカヤックに併走させ、イルカとのふれあいなども行います。また、対岸の夏山地区は良質な温泉が湧き出ており、町ではカヤックでの立ち寄り施設(トイレやシャワールーム、温泉施設や地元の物産販売等)の整備をします。

これらの太地町の自然を活かした観光を進めていくため、当該支援措置による、エコツーリズムに関する情報提供を活用していきます。